

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月5日現在

機関番号：32602

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03140

研究課題名(和文) 東アジアの戦争観光とナショナリズム

研究課題名(英文) War Tourism and Nationalism in East Asia

研究代表者

高山 陽子 (TAKAYAMA, YOKO)

亜細亜大学・国際関係学部・教授

研究者番号：20447147

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦争と災害の記憶の保存と展示について東アジアの事例を比較検討した。ダークツーリズム研究が始まった西欧では、戦争や災害における人の死はユダヤ＝キリスト教的な死生観に基づくことが前提として分析が行われてきたが、儒教的・仏教的な死生観を持つ東アジアでは西欧的なダークツーリズムの枠組みをそのまま用いることはできない。植民地からの独立戦争や革命戦争という戦争の記憶や、東日本大震災や四川地震の記憶など個別の記憶と集合的な記憶がどのように博物館などで展示されるかという事例を通して、本研究ではどのような分析枠組みが可能であるかを探求した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、戦争観光とナショナリズムの分析において多文化共生の視点を取り入れたことである。現代社会では、多様な文化的背景を持つ人びとが暮らすゆえに、一方的な被害者であることを語ることはできず、また、被害者を一枚岩的に見なすこともできない。従来の観光には往々にして植民地主義的な視点が内在し、見る人＝欧米諸国の人びと／見られる人＝植民地の人びと、という固定的な図式が成り立っていた。しかし、現代では偏った展示をすればインターネットでたちまち世界中に広がり、批判の対象となる。本研究は、戦争や災害などのダークな出来事の保存と展示の在り方について東アジアの諸事例から明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to examine a process to be saved and exhibited the dark memory of wars and disasters in museums by comparing East Asian cases; Japan, China, South Korea, Taiwan, and Vietnam. The concept of dark tourism occurs in the West, therefore the perspectives often depend on Judeo-Christian tradition. On the other hands, the East Asian view of death still has some influence on Confucianism, Buddhism and Taoism, despite modernization and globalization. It is necessary to explore another analytical framework of dark memory like revolutionary wars and recent earthquake disasters, which are specific phenomenon in East Asia.

研究分野：文化人類学

キーワード：戦争 観光 記憶 博物館 震災 東アジア

1. 研究開始当初の背景

1. 研究の学術的背景

21世紀に入り、世界的に観光客数が増加するに伴い、観光研究の分野が多様化していった。かつて観光研究の中心を占めていたのは経営学であるが、近年ではフィールドワークに基づく社会学や文化人類学的な研究が増加した。また、従来の文化人類学や社会学における観光研究は、フィールドワークの副産物として、現地社会の観光開発の影響などを単発的に分析していたものから、宗教的巡礼やナショナリズム、記憶など、従来の研究主題および他の研究分野と交錯するような論考も増えた。さらに、2016年にはアニメや映画の舞台を訪れる「聖地巡礼」が流行語に選ばれたように、観光そのものも多様な側面を持つようになった。本研究は東アジアにおける戦争や災害などの負の記憶の観光資源化とナショナリズムの関わりに着目する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、東アジアにおける戦争観光の分析を通して、ナショナリズムの多面性を明らかにすることである。

一般的に近代戦争は、ヨーロッパにおいては植民地獲得戦争の一形態を成していたが、東アジアにおいては植民地からの解放あるいは植民地化の危機からの脱却という側面を持つ。東アジアの戦争の記憶や体験は、公的な歴史の一部を形成し、博物館や資料館などにおいて保存されてきた。現在ではその一部は観光資源となり、戦争映画や戦争小説の流行にあわせて多様に解釈され、消費されている。本研究では、このような東アジアにおける戦争の商業的な利用という戦争の観光資源化を、文化人類学・地理学・宗教学・民俗学・政治思想史から学際的に考察し、東アジアにおけるナショナリズムを分析する。

3. 研究の方法

本研究は文献調査と実地調査を行い、以下の点を分析した。

政治的巡礼の特徴：宗教的巡礼との相違点

戦場と墓の聖地化、戦死者の英雄化、遺品や肖像の聖遺物化。

戦争の記憶の観光資源化

戦場と墓の観光資源化、戦死者や革命英雄の肖像の商品化、戦争博物館の大衆化。

ナショナリズムとノスタルジア

儒教的な「正義」の語りとナショナリズムの関係。

4. 研究成果

(1) 東アジアにおける「正義」の語りとナショナリズム

東アジアにおけるナショナリズムと戦争観光を、「愛国」と「正義」の語りと戦争の展示から分析した。東アジアの戦争の展示における「愛国」の語りは、排他的なナショナリズムというよりは独立を勝ち取るための人として正しい道を歩んできたこと、すなわち、儒教的・道教的な「正義」という意味が強い。これは、植民地からの独立戦争・解放戦争であったという戦争そのものの特徴を反映していると同時に、「正義」の戦争であったと語ることによって、現政権の正当性を証明しようという側面を持つ。そのため、「愛国」や「正義」を語ることが狭義のナショナリズムにつながることもある。東アジアにおける戦争観光を論じるもう一つの切り口はノスタルジアである。「正義」のための戦争であったことは、その時代が正しく美しいものであったという記憶と結びつく。戦争というダークな体験でありながらも、そこにノスタルジアが垣間見られるのは、格差が拡大するグローバルの時代に生きる人びとが現状に不満や不安を抱いているためでもある。美しい過去という幻想は、ナショナルな記憶と不可分に結びつくことを明らかにした。

(2) 戦争の記憶とノスタルジア

文化人類学科分科会「ノスタルジアとナショナリズム：東アジアの戦争観光比較から」(代表：山口睦)というタイトルで、中国・韓国・台湾・日本の戦争観光をノスタルジアという側面から分析し、ナショナリズムの多面性を明らかにすることを目的とした。具体的には、現代の東アジア諸国における戦跡や植民地支配の遺産が観光資源として成立した過程を描き出し、そこに存在するノスタルジアとナショナリズムの動きを分析した。楊小平は、広島原爆ドームを事例に「被害者」の語りから見る日本のナショナリズムについて考察した。金賢貞は、韓国における日本統治下の建造物からみるナショナリズムとノスタルジアについて分析した。藤野は、戦後、政治犯を収容する監獄が人権文化園区として整備された台湾東部の緑島の事例から、白色テロの被害者、関係者、観光客らの間で交差するノスタルジアとその敵対性を植民経験の重層性から読み解いた。山口は、日本の平和/戦争博物館における零戦展示から日本における戦前へのノスタルジアを論じた。田中は、中国共産党ゆかりの地をめぐる紅色旅行(レッドツーリズム)の拠点一つである四川省震災遺跡公園から現代中国のナショナリズムを論じた。

引用文献

高山陽子

「革命の歴史の資源化：紅色文化における解放の語りと展示の分析を中心に」長谷川清・河合洋尚（編）『資源化される「歴史」：中国南部諸民族の分析から』風響社、2019、363-388

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 27 件)

高山陽子

「革命の歴史の資源化：紅色文化における解放の語りと展示の分析を中心に」長谷川清・河合洋尚（編）『資源化される「歴史」：中国南部諸民族の分析から』風響社、2019、363-388

高山陽子

「女子旅におけるアジアの表象：台北・上海・香港の事例から」『亜細亜大学国際関係紀要』27(1)、2018、49-74

高山陽子

「社会主義キッチュに関する一考察」『亜細亜大学国際関係紀要』26(1/2)、2017、115-134

高山陽子

「文化資源としての戦跡：旅順の事例を中心に」塚田誠之（編）『民族文化資源とポリティクス：中国南部地域の分析から』風響社、2016、377-402

高山陽子

Socialized Body in Modern China 『亜細亜大学国際関係紀要』25(1/2)、2016、15-39

高山陽子

「中国の世界遺産」瀬川昌久（編）『東アジアの世界遺産と文化資源』（東北アジア研究センター報告19）2015、9-24

高山陽子

「社会主義キッチュと革命観光」『亜細亜大学国際関係紀要』24(1/2)、2015、55-79

岡本亮輔

Practicing without Believing in Post-Secular Society: the Case of Power Spot Boom in Contemporary Japan 『ヨーロッパの世俗と宗教』上智大学ヨーロッパ研究所、2019、94-98

岡本亮輔

「ダークツーリズムから見る聖地巡礼：カトリックの聖遺物と主観的真正性」『立命館大学人文科学研究紀要』110、2017、61-84

大塚直樹

「銅像空間の歴史地理学：ホーチミン像を事例として」『立教大学観光学部紀要』21、2019、83-90

大塚直樹・丸山宗志

「フランス領インドシナの外邦図と「南進論」」『亜細亜大学国際関係紀要』26(1/2)、2017、91-114

大塚直樹、丸山宗志

「ホーチミン市におけるバックパッカーエリアの空間的特徴」『地理空間』9(1)、2016、45-62

大塚直樹

「ベトナム社会主義のなかのホーチミンと観光実践」『亜細亜大学国際関係紀要』24(1/2)、2015、131-142

金賢貞

「韓国の文化財行政と「近代」：「登録文化財制度」の新設を中心に」『亜細亜大学国際関係紀要』28、2018、1-42

金賢貞

「現代韓国における植民地遺産と近代観光：「九龍浦近代文化歴史通り」を事例に」『日本民俗学』(292)、2017、29-60

藤野陽平

「旧帝国日本の博物館をめぐる交差するまなざし：国立台湾博物館とサハリン州立郷土博物館との比較から」『世新日本語文研究』10、2018、1-33

藤野陽平

「台湾における「日本語」によるキリスト教の高齢者ケア：社団法人台北市松年福祉会玉蘭荘の機関紙分析より」三尾裕子・遠藤央・植野弘子（編）『帝国に本の記憶：台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』慶応義塾大学出版会、2016、183-209

藤野陽平

「ユネスコ非加盟の台湾からの世界遺産登録に向けた動き：社会的文脈によって揺れる文化遺産」『国立民族学博物館調査報告』136、2016、163-178

田中孝枝

「日中観光ビジネスにおけるリスク管理に関する民族誌的研究 中国広州市・美高旅行社を例として」博士学位論文、東京大学大学院総合文化研究科提出、2018

田中孝枝

「都市郊外型団地における多文化共生の課題：高大接続アクティブラーニングの試み」『紀要=Bulletin』11、2018、151-156

⑳田中孝枝

「エスニック・ビジネスとしての観光業：在日中華系旅行会社のネットワークとサービス」『旅の文化研究所研究報告』26、2016、17-26

㉑田中孝枝

「旅行業のエスニック・ビジネスとしての側面：ホストとゲストからネットワークへ」『紀要=Bulletin』8、2016、133-148

㉒山口睦

「災害支援としての慰問袋：20世紀前半の新聞記事を資料として」『やまぐち地域社会研究』15、2018、45-64

㉓山口睦

「手作り復興商品にみる被災地性の演出と脱却：東日本大震災を中心とした考察」『観光学評論』6(2)、2018、191-205

㉔山口睦

「県境を越えたもの、越えなかったもの：宮城県丸森町筆甫地区における放射線対策」『東北文化研究室紀要』57、2016、23-39

㉕楊小平

「日本戦争與平和博物館展示中“南京”」(和訳：日本の戦争と平和博物館に展示される「南京」)『日本侵華南京大虐殺研究』2018年度第3号、2018、43-51

㉖楊小平

「中国人留学生の原爆被爆とヒロシマ：広島大学前身校の中国人留学生被爆者の人生を通して」『アジア社会文化研究』18、2017、147-171

[学会発表](計 17 件)

高山陽子

「烈士陵園の景観：南部と北部の記念碑の比較から」国際シンポジウム「中国における歴史の資源化 その現状と課題に関する人類学的研究」2016

高山陽子

「中国における革命観光と社会主義キッチュ」第4回観光学術学会全大会、2015

高山陽子

Socialized Body in Modern China. The Ninth World Congress of ICCEES、2015

田中孝枝・狩野朋子

「アジアにおけるヘリテージツーリズムと防災：中国、ネパール、トルコの比較から」総合観光学会、2018

田中孝枝

「日中観光ビジネスにおけるリスク管理の諸相：中国広州市の日系旅行社を例として」日本国際文化学会第17回大会、2018

Megumi Doshita, Shinji Yamashita, Takae Tanaka, Hiroi Iwahara, Momoyo Gota, Tomoko Kano,

Re-construction of Heritage for the Future: Disaster, Culture, and Tourism, EASA Conference in Stockholm, 2018.

Tomoko Kano, Shinji Yamashita, Momoyo Gota, Megumi Doshita, Takae Tanaka, Hiroi Iwahara,

Cultural Resilience for the Future, International Conference on Future of the Past: Tourism and Cultural Heritage in Asia, 2018.

Tomoko Kano, Momoyo Gota, Takae Tanaka,

Social places of heritage: Disaster risk mitigation plan in Asia. The 8th International Conference on Building Resilience, 2018.

World Heritage and Tourism in Asia: In Relation to Disaster Risk Management

Tomoko Kano, Shinji Yamashita, Megumi Doshita, Takae Tanaka, Hiroi Iwahara, Momoyo Gota

The process of negotiation and comparison between “Chinese style” and “Japanese style” in the office: A case study of a Japanese travel company in Guangzhou, Chin. EATSA (Euro-Asia Tourism Studies Association)、2017.

藤野陽平

「「国境」地域としての台湾における宗教と政治の諸相」東南アジア学会、北海道・東北地区主催研究集会、2018

藤野陽平

「台湾のキリスト教徒による靖国参拝と独立運動」日本宗教学会第76回学術大会、2017

藤野陽平

「伝統・被災・未来を紡ぐ復興の姿日本基督教団宮古教会の被災と移転」東アジアキリスト教

交流史研究会ソウル国際セミナー、2016

藤野陽平

「公と私との間でのフィールドワーク:岩手県宮古市教育委員会との震災記録保存の協同から」シンポジウム「東アジアにおけるフィールドワークの実践と課題」2016

藤野陽平

「ポスト・コロニアル台湾で親日を選択する:台湾の独立派キリスト教を例として」国際ワークショップ「戦争の記憶」2016

楊小平

「芸術興平和 平和象徴物的創造興社会意義」2018 年中国芸術人類学国際シンポジウム(南京・東南大学) 2018

楊小平

「ヒロシマは国際化したのか:中国からのまなざし」日本国際文化学会第17回大会、2018

山口睦・藤野陽平・楊小平・金賢貞

「ノスタルジアとナショナリズム:東アジアの戦争観光の比較から」文化人類学会第51回大会、2017

〔図書〕(計 8 件)

高山陽子(編著) ミネルヴァ書房、『多文化時代の観光学:フィールドワークからのアプローチ』2017、232

岡本亮輔、出版文化産業振興財団、『Pilgrimages in the Secular Age: From El Camino to Anime』2019、176

岡本亮輔(他) 亜紀書房、『東アジア観光学:まなざし・場所・集団』2017、320

岡本亮輔、筑摩書房、『江戸東京の聖地を歩く』2017、317

岡本亮輔、中央公論新社、『聖地巡礼:世界遺産からアニメの舞台まで』2015、228

藤野陽平(他) ハーベスト社、『ホッピー文化論』2016、178

今津敏晃(他) 芙蓉書房出版、『最後の貴族院書記官長小林次郎日記:昭和20年1月1日~12月31日』2016、240

今津敏晃(他) 岩波書店、『吉野作造政治史講義:矢内原忠雄・赤松克麿・岡義武ノート』2016、512

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 今津敏晃

ローマ字氏名: Imazu Toshiaki

所属研究機関名: 亜細亜大学

部局名: 法学部

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 60449973

研究分担者氏名: 大塚直樹

ローマ字氏名: Otsuka Naoki

所属研究機関名: 亜細亜大学

部局名: 国際関係学部

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 80549486

研究分担者氏名: 岡本亮輔

ローマ字氏名: Okamoto Ryosuke

所属研究機関名: 北海道大学

部局名: メディア・コミュニケーション研究院

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 30747952

研究分担者氏名：金賢貞
ローマ字氏名：Kim Hyeonjeong
所属研究機関名：亜細亜大学
部局名：国際関係学部
職名：講師
研究者番号（8桁）：20638853

研究分担者氏名：田中孝枝
ローマ字氏名：Tanaka Takae
所属研究機関名：多摩大学
部局名：グローバルスタディーズ学部
職名：専任講師
研究者番号（8桁）：50751319

研究分担者氏名：藤野陽平
ローマ字氏名：Fujino Yohei
所属研究機関名：北海道大学
部局名：メディア・コミュニケーション研究院
職名：准教授
研究者番号（8桁）：50513264

研究分担者氏名：加藤睦
ローマ字氏名：Kato Mutsumi
所属研究機関名：山口大学
部局名：人文学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：70547702

研究分担者氏名：楊小平
ローマ字氏名：Yang Xiaoping
所属研究機関名：東亜大学
部局名：人間科学部
職名：客員研究員
研究者番号（8桁）：30736260

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。